

主論文の要約

無意識の物語 近代日本と心の行方

一柳 廣孝

19世紀から20世紀にかけて、「心」のイメージは大きく変容した。魂の属性としての「心」から、脳内現象としての「心」への変化である。英米圏では、それは soul、spirit から mind への移行という形で現われた。古代から続く心身二元論に対して、人間をひとつの有機的な統一体とみなす考え方が優勢になった結果である。こうしたダイナミックな「心」イメージの変容は、遠く日本にあっても大きな影響を蒙ることとなった。

本研究の根底にあるのは、明治期のパラダイム・チェンジがもたらした、霊をめぐる言説布置の再編の問題である。古代から連綿と継続し、現代もなお形を変えながら機能しつづけている日本人の霊魂観は、明治期のこの激変によってどのような変容を強いられたのだろうか。この問いかけからは、例えば日本「精神」、大和「魂」といった、イデオロギッシュな場所に再配置された「霊」の問題なども浮かび上がってくる。しかしここで主に取り上げたいのは、学的パラダイムの変化によって生じた現象である。

西洋の学問の移入、ことに科学的合理主義の導入にともない、従来 of 民俗的な霊魂観を迷信として排除する道筋が整えられた。そのさいに大きな役割を果たしたのは、心理学である。そもその出自である哲学的視点を切り捨て、実験科学的な側面を強めていた当時の心理学は、実体としての「魂」に関する論究を放棄し、「魂」を分析概念としての「意識」「精神」に置換していった。

これらの用語は、心理学が日本に導入され、心理学の専門用語が翻訳されて定着していくプロセスのなかで、もともとその語が担っていた日本語としての意味を侵蝕し、やがて学問の権威の下に、心理学的なニュアンスの語彙が優位に立っていく。その結果、「意識」や「精神」という日本語に内在していた霊性は薄められ、「心」の神秘性も損なわれた。第1章では、このような変化の諸相について考察している。しかし、この間、西洋の心理学・精神医学は、思わぬ未開の大陸を発見していた。フロイト精神分析の登場にともなう「無意識」への注目である。

精神分析が20世紀の思想に与えた強烈なインパクトについては、よく知られている。心理学、精神医学は言うに及ばず、歴史学、社会学、文化人類学、文学など、その影響はきわめて広範に亘る。フロイト精神分析は日本にも紹介され、さまざまな領域で取り上げられた。

本研究の第I部で扱っているのは、心理学の移入にともなう近代日本の「心」をめぐる言説布置の変化と、さらにその「心」に関する諸言説がフロイト精神分析と接触することで「聖なるもの／不気味なもの」を呼び込んでいくプロセスに内包された諸問題である。

ここで考慮すべきは、フロイト精神分析の正当性、事実性の如何ではない。フロイト精神分析がもたらした「無意識」という物語が、日本においていかなる文脈の中に取り入れられ、再編され、新たな物語を生成していったのか、という点にある。

その意味で、「無意識」の存在を最初に日本社会に知らしめたのが、アカデミズム経由の情報ではなく、1903（明治36）年頃から顕在化する催眠術ブームだったことは強調している。催眠術ブームを牽引した当事者たち、催眠術書の執筆者や催眠術家たちは、肉体を凌駕する精神の力を強くアピールした。彼らの主張はやがて、我々の内面に存在するという力がどこに秘められているのか、という問いを呼び覚ます。第2章では、明治三十年代から昭和初期に至る催眠術書の記述から、やがて催眠術が精神治療と結びつき、その治療法の根拠として副意識・無意識・潜在意識を見いだすまでのプロセスを確認する。

一方、催眠術によって顕在化するという、潜在意識下に眠る無限の力への憧れと希求が、超感覚の実在をめぐる学界やマスコミを紛糾させた千里眼事件（1910～11）を引き起こすこととなる。おそらく、同じ1910（明治43）年に柳田国男が『遠野物語』を公にしているのは、偶然ではない。『遠野物語』は実話怪異譚としての側面を持つが、その背景には、当時文壇で流行していた「怪談」への眼差しが存在するからだ。ここでの「怪談」とは、近代を経由するなかで再発見された霊魂への関心にもとづく、いわば文学的な運動体である。千里眼事件とは、超感覚を媒介にして文学と科学の両面から「心」の再認識を迫ったトピックだったのだ。

しかし千里眼事件が、物理学アカデミズムの否定的見解の表明によって収束していった結果、「心」の神秘性もまた、科学のレベルではほぼ否定された。だが、その「心」観に「無意識」という概念が導入されることで、「心」は再び「科学」によって解明されるべき未開の原野、闇の領域とみなされていく。このプロセスについては、第3章で詳述する。

さて、20世紀初頭に「心」に新たな光を当てつつ、そのブラックボックス化を進めたのが精神分析だとすれば、その精神分析によって特権的な意味を付与されたのが「夢」である。やがて「夢」は、新時代にふさわしい「不気味なもの」の物語を紡ぎはじめる。フロイト『夢解釈』（1900）以降、夢は「無意識」への王道たりつづけた。近代日本のアカデミズムにおいて、夢がどのように語られたかについては、第4章で触れる。またフロイト精神分析の日本での波及状況については第5章で、心理学アカデミズムが一般社会に向けての情報発信をも意図した最初の学術誌である「心理研究」を軸に考察を試みた。

以上の点を踏まえて第Ⅱ部では、夢と「無意識」をめぐる芥川龍之介の軌跡を追う。そもそも「無意識」をめぐる問題系は、人間の心の深奥を探っていた明治期の文学者にとって焦眉の課題のひとつであった。二葉亭四迷や夏目漱石、森鷗外らが意識と「無意識」をめぐる独自の思索を深め、作品に反映させていたことについては、近年さまざまな研究成果が公になっている。そして、大正期の先端的なフロイト受容とも関わりながら、持続的に「無意識」の文学的表象に取り組んだほぼ唯一の存在が、芥川龍之介である。その意味で芥川の描いた軌跡は、大正期における物語としての「無意識」の、代表的な様態を示

している。

早くから夢に多大な関心を寄せていた芥川は、夢の象徴機能や寓意性を利用した作品や、夢のリアルな再現を目指した作品を公にしている。やがて彼の関心は、夢の向こう側に広がる「不気味な」「無意識」領域へ接近していった。夢と「無意識」をめぐって芥川の残した言説には、大正期の文学場におけるフロイト受容の一端が示されていると同時に、日本における「心」や「靈魂」のイメージがフロイトとの接触によって変容するそのありようが、刻み込まれている。この間の文脈については、第 6 章から 9 章で詳述する。

また「無意識」をめぐる芥川独自の軌跡は、時に心霊学を媒体としたメーテルリンクへの関心として表出し（第 10 章）、また時に、日本古来からの民俗的な恐怖の表象や心霊学的世界観を取り込んだ作品の形で示されている（第 11 章）。こうした多方面にわたるアプローチは、やがて芥川を探偵小説というジャンルとも結びつけていく（第 12 章）。

芥川の「無意識」への接近は、大正末期から文学場でも高まってくるフロイト精神分析受容の動向に先行し、なおかつ連動している。この意味においても、芥川は大正期の「無意識」を体現した作家なのであり、日本における「無意識」という物語を考察するうえで、欠かせない分析対象といえよう。